

バイロイト紀行

中井紅弥

ワーグナーは、19世紀を代表するドイツの作曲家、思想家です。

中世の歴史や伝説を取り入れ、神秘的、幻想的な舞台を演出するのを「ドイツロマン派オペラ」と言いますが、ワーグナーは、まさに「ドイツロマン派オペラ」の頂点に立つ人でした。ワーグナーのオペラは、モーツァルトやヴェルディのオペラと違って、構想から脚本、作曲を一人で作った総合芸術なのです。楽劇と呼ばれています。

ワーグナーはライプツィヒに生まれ長い創作活動と流浪の時代を経て、バイエルン国王ルートヴィヒ二世に見いだされ、王の庇護のもとバイロイトに祝祭劇場フェスト・シュピールを建てます。この劇場で毎年七月・八月に音楽祭が開かれ、世界中からワグネリアンと呼ばれるワーグナー愛好家が集まりワーグナーの音楽に酔いしれるのです。

祝祭劇場

私は三回、バイロイトを訪れワーグナーの楽劇を鑑賞しましたが、初めて行った一九九二年の旅行が一番印象に残っています。

私が祝祭劇場フェスト・シュピールを訪れたのは、バイロイト地方に早い秋の訪れを感じる八月の中旬、息子との二人旅でした。

そのころ私はまだ会社勤めをしていたので、長い夏の休暇を取っての少々気のひける旅でした。

飛行機でフランクフルトに着き、そこからバイロイトまでは汽車の旅です。フランクフルトではJALに勤務していた従姉妹の娘に行く先案内してもらい、ミュンヘン行きのホームにたどり着くことができました。

ミュンヘンまでヨーロッパの都市間を走る国際特急列車ECのコンパートメントに乗り、息子とほっとひと安心してくつろぎました。途中ニュルンベルグ駅でバイロイト行きローカル線に乗り変えるのですが、ローカル線とは言え超モダンで小ざれいな車両です。遠くに教会の屋根が見える牧歌的な風景の中を一時間、とうとうバイロイト駅にたどり着きました！ 東ドイツとの国境に近いひっそりした田舎の駅です。駅の売店で飲んだ白麦ビールのおいしかったこと！ 日本からの長旅の疲れを一気に忘れさせてくれるものでした。

日本でいえば長野県にある田舎の小駅と言ったところでしょうか。

駅からタクシーで五分とかからない所の「ローミユウレ」という三角屋根が宿泊先。窓辺に赤い花が咲くこじんまりした田舎風ホテルでした。窓の下にせせらぎの音が聞こえていました。

ニーベルングの指環

このホテルから「ニーベルングの指環」の公演を四日間かけて通うのです。「ニーベルングの指環」は通称「リング」と言われます。ライン川の川底でラインの乙女たちが守っている指環。この指環を持つものが無限の愛と権力を手に入れることができるという楽劇です。

序夜は「ラインの黄金」

第一日は「ワルキューレ」

第二日は「ジークフリート」

第三日は「神々の黄昏」

この四演目が一日一演目ずつ上演されます。一演目に八十何時間もかかる長大な楽劇なのです。終るのは深夜です。私は毎夜真つ暗の夜道を歩いて宿に帰りました。長いドレスにパンプス姿で歩くのは、並大抵ではありませんでした。

この舞台に、片桐仁美さんが唯一日本人歌手として、居並ぶ欧米の女性歌手に交じり健闘されていました。片桐さんは

大阪出身の、日本を代表するアルト歌手。ワグナー協会例会で独唱してくださったので馴染深い方です。舞台上をレーザー光線が走る暗示的なシユールな舞台に、片桐さんは戦う乙女ワルキューレの一人として縦横無尽に走り回っておられました。

チェルノブイリ・リング

公演のある日は、劇場の正面バルコニーでその日のライトモチーフがトランペットで三回吹奏され、開演を知らされます。それを合図に劇場内に入のですが、外から重い扉を入るといきなり客席ホール、ロビーなどはありません。

フェスト・シユピーレの座席は、お尻が痛くなるような木の椅子。遅れて席につこうとすると、すでに座席に座っている人に立つてもらわないと席にたどりつけないほど間隔が狭いのです。

開幕と同時に劇場内は暗黒の闇にすっぽり包まれます。オーケストラは舞台の下に隠れていて、そこから一筋の光も漏れてきません。暗黒のしじまの闇の中から静かに音がわき起こってくるのです。ホールそのものが音響のるつぽと言ったらいいでしょうか。私はまさに音のるつぽの真つ只中にいました。

その年の「リング」は、バレンボイム指揮、クプファー演出で「チェルノブイリ・リング」と言われるものでした。

オランダの哲学者スピノザは

「セファラド」の血筋だった

大河内健次

一、「セファラド」とは何か

「セファラド」といつてもすぐわかる人は数少ないだろう。古代ユダヤ人がディアスポラ（民族離散）により各地に散って行ったが、中世までにイベリア半島（スペインおよびポルトガル）に住みついていたユダヤ人の子孫をセファラド（単数ではセファルデイ）と呼ぶようになった。もともとはヘブライ語でスペインを指す地名で旧約聖書オバデヤ書に現れている。英語で北ヨーロッパを中心に居住しているユダヤ人を「アシケナジーム」と呼び、アジア、アフリカ大陸出身のユダヤ人を「スファラデイーム」と呼ぶようになるのはイギリスの中近東委任統治以降のことであって、ここでは古来の「セファラド」の意味で使っている。

ユダヤ人というとドイツのナチスによるユダヤ人迫害にすぐ連想が働くが、世界史を思い起こせば古代紀元前六世紀の

バビロニアによるユダヤ王国の民族の離散を想起するかもしれない。一四九二年のスペインによるユダヤ人追放は追放されたユダヤ人の数が約二十万人と多かつたこと、ユダヤ人はスペインではムーア人を中心とするイスラム人勢力との関係も悪くなくおよそ八百年におよぶイスラム人のスペイン支配の間、比較的安定した生活を享受していたことから、この追放はユダヤ人の歴史の三大災難の一つに数えられている。スペインにおけるユダヤ人は決して新参者という訳でなく西暦前、千五百年以上前から居住していたのにスペインのレコンキスタ（国土回復運動）により十五世紀末イスラム勢力を地中海のあなたに追いやるとともにカトリック王連合はユダヤ人にカトリックへの改宗を迫り、応じない者はすべて追放処分としたのだった。

二、『セファラド』という小説

小説『セファラド』はスペインの現代作家アントニオ・ムニョス・モリナが二〇〇一年に発表した小説で、二〇一三年イスラエルのエレサレム賞を獲得し、同年スペインで最高文学賞といわれるアストゥリア皇太子賞をも受賞した。そして、世界の約三十ヶ国で翻訳された原書では五百四十一頁におよぶ大著である。

私はこの小説『セファラド』の邦訳に取り組んでいるが、この作家の名前を知ったのは二〇〇五年と二〇〇六年にスベ

インのある大学の夏期大学に短期留学のときだった。その頃、欧州各国語の外国人のための教育レベルを統一しようという動きがあり、テキストのレベルについても種々議論されていた。夏期大学はこの種の運動に携わっている教授連が直接講義をするので、受講者には受講デプロマを授与されるので人気が高く、各国の大学から教授連が集まっていた。ある昼休みに将来、現代の若手作家でノーベル文学賞を取れるものは誰かということが議論されたが、人気のあった作家の一人がムニョス・モリナだった。それ以来少しづつ彼の作品を私は読んで来たが、一向に邦訳されないで、私自身で翻訳をすることを決意し、一昨年十一月この作家の処女作である『鏡のある館』を翻訳出版した次第である。

この小説は十七の独立した短編小説から成っている。系譜からいえば米国のウイリアム・フォークナーに繋がる作家でフォークナーがその作品『野性の棕櫚』で試みた相互には異なる内容の小説を章毎に語って行き、音楽の対位法のように総合的效果を狙う様式をこの作家もこの作品で採用している。中世の文学や例えば近代初めのセルバンテスのドン・キホーテのように小説の中に小説があるように読んでもいいし、それぞれの章を短編小説のように読んでも構わないが、十七の章は大別すると次のグループに分かれる。

第一に著者の出会ったセファルデイの話および接した人々の話でフィクション化されたものも含むもの。多くは一人称

の語りのもの。

第二章「コペンハーゲン」は作家会議で出会った女流作家サフラの話で、デンマークへ亡命後叔母を探しにパリに戻ったときにナチスの恐怖の追体験をした。第六章「おお、そうと知っていた君よ」はスペイン領事の計らいでブダペストから無事タンジールへ避難できた話。この章の詳細は後述する。第十七章の中のローマで出会ったルーマニアの作家エミール・ロマンの話。第四章「そんなに押し黙って」と第十五章「ナルヴァ」は第二次世界大戦中ドイツの恩義に報いるためフランコ将軍がレニングラード戦線に派遣したスペイン義勇兵の話。フランコと対峙していた共和党政府の要人で内戦終了後ソ連へ亡命した者がいたが、第十二章「シエラザード」は亡命していたスペイン共産党総裁イバルリ・パシオナリア（女性）の末娘イマヤ・イバルリの話。第十章「セルベール」は同じく共産党幹部の夫人がソ連亡命を拒否し、スペインに留まったことに纏わる話。第十一章「どこへであれ人は行くとしても」は著者がマドリッドの旧市街に居住していた頃見聞いた麻葉中毒患者やSIDA患者など生ける屍のような人物群を描く。やがて強制移動させられたがユダヤ人に対する強制収容と似た追放だった。

第二に著者の自伝に類するもの。

第八章「オランピア」は地方都市の役所勤めの悲哀、たまにマドリッドに出張し、昔の恋人に会う。第十六章「お名前

「南洋」・「戦争」そして父

川本卓史

古手紙整理してをり亡き人の手紙は

ことにしみじみとして――

上田三四二

第一章父の手紙と昭和の戦争

(第一節)

人生の店仕舞いの年齢ともなり、かねて身辺整理の必要を痛感していました。整理しないといけない私物に書信があります。生前の母が海外に暮らす私に書き送ったものなど、なかなか捨てられません。手許には、母宛てのものもあります。例えば、学校時代の同級生で親しかった秩父宮勢津子妃からの手紙です。

昭和二十年八月、広島の中国地方総監府に勤務していた父川本邦雄は原爆のため四十二歳で死去し、母は五人の幼い子供を抱えて突然寡婦になりました。そのことを知った勢津子妃からの、友人の悲しみを労わり励ますお悔やみ状もその中

の一通です。巻紙に毛筆で書かれた心のこもった手紙を、母は生涯大事にし、最後まで捨てられなかったのでしょうか。

私が居なくなったら散逸してしまうだろう、どうしたものかと考えていたところ、一年前の雑誌「あとらす」に勢津子妃の回想録『銀のボンボニール』（主婦の友社）を紹介する機会があり、その中で手紙の存在にも触れました。秩父宮夫妻が宮の療養を兼ねて晩年を過ごした御殿場の住まいがいま記念公園の一部として保存されており、記念館もあります。思い立って公園の園長に「あとらす」を送り、連絡を取ったところ関心を持ってくれて記念館で預かろうという話になりました。私信ではあるが内容的に問題なく、特別展を開催する際は展示を考えようとも言ってくれて、母も喜んでくれるかなと安堵しているところです。

母宛てには、父の手紙もあります。全て海外からです。これはいずれ処分するしかないだろう、それならこの機会に、父が生前書いたその他の資料とともにもう一度読み返し、文章に残しておきたいと考えるにいたった次第です。ということで今回は私事が多く、一般向けではない内容になることをお許し下さい。

なお、手紙や著書などの引用にあたっては読みやすさを考慮して適宜現代仮名遣いなどに改めました。現代では不適切な表現もありますが、そのまま引用した場合もあります。年代の表示にあたっては適宜、元号と西暦とを併用し、使い分

けました。

*

明治三十六（一九〇三）年生れの父は昭和の初め、大学を出て役所勤めを続けました。広島に赴任する前、三十代の半ばからは、「海外における移民・植民・および海外拓殖事業」に関する事務を管掌する「拓務省の南洋課長をしていた時期がありました。

当時、「南洋」という言葉が使われました。拓務省南洋課の所管地域は、ほぼ現在の東南アジア諸国（以下の括弧内に当たる、仏領インドシナ（略して「仏印」、現在のベトナム、ラオス、カンボジア）、英領マラヤ（現マレーシア）、英領シンガポール、米領フィリッピン（ただし、すでにアメリカから将来の独立を約束されていた）、オランダ領東インド（略して「蘭印」、現インドネシア）、英領ビルマ（現ミャンマー）などを含みました。独立国だったタイを除いては、英米仏蘭の「植民地」ないし「海外領土」でした。

戦争前から日本はこれらの地域と経済交流があり、当時約四万人の日本人が居住していたそうです。農業・水産・商業が主だったが、ゴムや麻の栽培、豊富な鉱物資源の開発に関わる企業も進出していました。父は現地の日本人の活動を調査し、この地域と日本との結び付きを深めるにはどうしたらよいかなどの事務を担当していたのでしょう。課長時代に二度出張する機会があり、滞在は延べ九カ月になります。

最初は、昭和十三（一九三八）年八月から三カ月、フィリピン、蘭印のボルネオ・ジャワ・スマトラの三島、英領マラヤ、タイ国の各地を視察し、二度目となる最後は「第二次日蘭会商」の随員の一人として昭和十五（一九四〇）年九月月から半年、バタビヤ（ジャワ島）にあり、現在のインドネシアの首都ジャカルタ）に滞在しました。

これらの海外経験で得た知見や体験をふまえて、「南洋」についての文章を専門誌に載せたり、雑誌が企画する座談会に参加したり講演をしたりした記録が、数多く国会図書館に保存されています。昭和十七（一九四二）年には、『南方への指標』（朝日新聞社）、『大南洋の話』（偕成社少年少女文庫）という二冊の著書を出しました。

父は海外出張に当たって、船上や滞在先のホテルから、妻や子供たちにために手紙や絵葉書を書いたようです。それらの多くは空襲で東京の家が全焼した時に失われ、母は九通を何とか残すことが出来ました。広島で夫を失い、子供を抱えて疎開地を転々とする中で、それらを懐かしく、孤独な自分の支えとして何度も読み返したことでしょう。死後、遺品として私の手に移りました。

（第二節）

本稿を書き進めるに当たっては、私なりに太平洋戦争の歴史を振り返る必要があります。とくに、「戦争」に突入する

漢詩の世界

——日本の漢詩（第一回）

桑名靖生

はじめに

日本語を考えてみたい。「何を今さら」と言われるかもしれないが、私は母国語である日本語を大切にしたいと思っ

ている。今これを書いている文章は「漢字かな交じり文」である。普段使っている文章を漢字無し、ひらがなだけで書いたらどうなるであろうか。『文章を漢字無し』は『ぶんしょうをかんなじなし』となつて、こんな短い文章でも意味を把握するの

に時間を要するということが、ご理解頂けると思う。日本は古代から文字の無い、話し言葉だけの時代が続いていた。五世紀から六世紀頃、中国から仏教経典などと共に漢字が伝わった。そしてその漢字の音を使い、さらに意味を表す日本の言葉の訓も文字の中に取り込んで読み、書くことが

できるようになった。

例えば、「山」を「サン」と「ヤマ」というように読み、漢文の訓読法ができ、「登山」という漢語を「山に登る」と理解したのである。

中国からの借り物とはいえ、「漢字」という文字を得て、それを日本語として使った時の古代の日本人の感動はいかばかりだったであろうか。日本の文明の夜明け、革命が起つたのである。

平安時代に、「ひらがな」「カタカナ」の発明により、更に自由な表現ができるようになり、源氏物語、枕草子など女流文学の隆盛となる。以来「漢字かな交じり文」は連続と続き、現代に至るまで変わることなく日本語として使われている。

「漢字は難しい」と、以前から言われている原因の一つは、漢字の読みが表意文字と表音文字と二つの読み方にあるのもまた事実である。それを考慮しても、表意文字の漢字の使用は、言葉に、より深い表現、味わいをもたらすものであると思ふ。

ほぼ同時期に編纂された我が国最古の漢詩集「懐風藻」と、やまと歌と言われる『萬葉集』はいずれも漢字で書かれている。萬葉集は「万葉仮名」という漢字の音を借りて言葉として使用していて、文字に意味を持っていない。一例をあげる

と、「恋」は「古非・孤悲」、「ほととぎす」は「保登等芸須」、

「懐かし」は「夏楳・名津蚊為」、「董」は「須美礼」の如く、今でいう当て字とも言え、自由に歌を書くことができ、大きな発明ではなかったのではないであらうか。

萬葉集の代表的な歌を、万葉仮名と現在の読み方とで書いてみる。

春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香来山
春過ぎて夏来たるらし白妙の衣乾したり天の香久山

持統天皇（卷一・二八）

懐風藻

我が国最古の漢詩集懐風藻は、西暦七五一年に成立。近江朝から奈良期に至る六十四名の天皇・皇族以下、官吏、僧侶等が詩作した百十六首の漢詩が収められている。

著者は淡海三船、石上宅嗣と言われているが不明である。

題材は、当時最大の権力者であった天皇を中心とした朝廷の盛事を誇示する宮廷内での宴会・宴遊、吉野行幸や野外での狩りに天皇に従った際の詩作が多く、「天皇は神の如く」とひたすら賛仰しており、ちようど萬葉集、柿本人麻呂の《大君は神にしませば天雲の雷の上に盧せるかも》の歌と同列である。がこういう詩ばかりではなく、四季を詠い、自然を謳った詩や、「述志」の詩もあり、中国から舶来された漢詩集（南北朝時代から初唐の詩人たち）の影響、見よう見

真似で作った硬さはあっても初めての作詩の新鮮な喜びに溢れている。

懐風藻は最初に『序』から始まる。当然全文漢文であり、原文を次に要約、概説する。

『序』は、古事記・日本書紀を引き、天孫降臨から三韓征伐、孔子の学の渡来を述べ、更に聖徳太子により礼儀・法度が制定され、文化の芽が生じ、文を尊び学校を建て、文治の実があがつていったこと。

学問が盛んになり、多くの詩人が輩出したが、戦禍に見舞われ多くの詩を失った。時代も隔たってきた、古人の詩の失われるのを救い先賢の面影を忘れまいと考えたこと。

そして、序の最後に、著作に思い至った経緯を「遠く天智朝の御代から平城・奈良時代に至る先人の詩文が散逸するのを惜しみ」、「先人賢士の残された教えを忘れないようにと思ひ、故に懐風と名前をつけた。時は天平勝宝三年（七五二）辛卯の冬十一月である。」と結んでいる。

一、若き三人の皇子たち

懐風藻は最初に若い三人の皇子の漢詩から始まる。

その時代の歴史に夫々が係わらざるを得なかった皇子たち。あたかも飛鳥時代の内乱のドラマを観るように、懐風藻の著者も、八十年前に起こった事件を意識しているようである。

この三人の皇子とは、天智天皇の長子の大友皇子、第二子